

本から、妙に納得した。これが私たちの時代だ、と。

土台、基礎から大量の漫画が出てきたのである。もしも、地震が起きていたら……。ぞっとする。たぶん、これは他の人たちの家においても大なり小なり似たようなことはあるはずだ。建物に限らない。社会のあらゆる局面に「土台、基礎の漫画」はあるのではないか？

外岡氏は、そうした日本社会が辿ってきた「土台、基礎の漫画」を一つ一つ明らかにし、しかもそれをいかに未来に生かそうかともがいた。

読むのが辛くなるわけである。読者である私は彼のがき、あがきに吸い込まれそうになりながら、いちいち頷く。

もの書きのはしくれとして、その見事な仕事に羨望と驚嘆を覚えながら……。

外岡氏は人としての責任感でこの著作を彼の望むように後世に語り継がれるべき「記録」に仕上げた。この記録を読むことは、一人の人としての責任であった、と読み終えた今、思う。そう思わせる著作に巡り合えることは滅多に、ない。

(ノンフィクション作家)

民地主義を否定する行爲として喝えられていたがゆえに、その獲得地域(台湾、朝鮮)を「植民地」とは呼べないといつた、また、近隣の「人種」的にも文化的にも類似した人びとを支配下においたがゆえに、圧倒的な優位を保てないといつた、はなはだ歯切れの悪いものであった。こうしたことは、すべて、日本が、西欧の帝国主義における帝国と植民地の「中間存在」であることに由来する。植民地の人びとに対して、高圧的態度をとろうにも、自分よりさらに上の存在(西欧)があることを相手に知られ、やしないか、という不安が拭い去れないのだ。

こうした出生の条件を持つ日本帝国主義は、獲得した地域の人びとに対し、すでに植民地が経済的には合わないものであることが明らかであったこともあり、その軍事資源としての有用性、すなわち「日本人度」を測定することとなった。

その結果は如何。

資源であるから量、それに文化などの近接性や、教育による忠誠度の向上の可能性、といった質が問題となる。北海道の場合は、アイヌは「量的」に少ないた

日本人の、法と文化における可塑性の限界はどこに？

### 小熊英二

### 『日本人』の境界

### 船曳建夫

筆者は前回の書評(太田好信「トランスポジションの思想」)を、この項続く、とした。それは、その書評中に言及した、日本という国が、人類学を自生させるともに人類学を西欧から「植え付けられる」中間的な存在であったこと、そうした支配的でありながら被支配的でもある国家においてナショナリズムを超えるための方策(太田の構想ではアウターナショナルとして)の二点につらて、この小熊英二の著作を評することで、再び考えたかったからである。

小熊は、「日本人」とはどの範囲の人びとであり、それはどのように設定されてきたのか、という問いに答えようと、単純な図式で語ることにきわめて禁欲的に、それゆえに資料の渉猟にはきわめて貪婪に、大日本帝国の周辺地域(北海

め、活用はあまり問題とならず「旧土人」として「保護」の対象となった。沖繩はその量が比較的小さいため、効用の魅力は少ないが反乱の恐怖もあまりなく、質としては日本(文化)との近接性をたやすく言いうるどころから、「沖繩県」人という二次的な「日本人」として組み入れられた。戦後の復帰と「独立」の議論にもこの質と量が関係していよう。台湾と朝鮮は、質的には、その近接性は恣意的に近いとも遠いとも言われたが、軍事によって獲得され軍事の緩衝地帯として扱われたこれらの地域では、総督府という一種の「王国」によって、限りなく遠く設定された未来の時点に向かって、漸進的に日本人たりのものとして、戦争末期まであいまいな地位に置かれた。

こうした「日本人」という範囲の設定に関する日本の周辺地域政策論は、内務省や総督府などのセクショナリズムをふくんだ、すべてがご都合主義どしか呼べないようなものであった。しかしこうしたあいまいさは、戦争末期に台湾人と朝鮮人を急遽徴兵すべく「日本人」にした



新耀社 本体価格5800円

道、沖繩、台湾、朝鮮)に関する政策とそののちの歴史を通覧し、読者を八〇〇ページに及ぼうとする長論に呼び込む。巻である。多岐にわたるこの膨大な議論をこの誌面に縮約することは危険である。以下は、この著作に関する私の理解、として書く。そのつもりで読まれたらいい。

明治維新以来、遅れてきた国民国家として日本は、自意識としては、西欧からの植民地化に対抗するために、むしろ近隣をその軍事的緩衝地帯として植民地化するという構図の中に入った。その中で、日本にとって「日本人」とは、国家を築き展させるための資源として有用な人びと、直截に言えば天皇に忠誠であるものたちのことであった。しかしそうして生まれれた帝国主義は、その植民地獲得が植

ように、「支配側が『日本人』の境界をその時々利害によって決定する裁量権を確保するために設けた抜穴であり、支配がもつとも発揮される場であったといえるよう」。しかしまた、この支配の側が自分たちの願望を達成するために残した隙間は、「そこに『日本人』という分類の枠を容容させていく抗争の足場が存在しうる。……その足場は……危険性と同時

に、ナショナリズムの連鎖から逃れうる可能性を示唆するものといえるであろう」と著者は言う。ここでは、この著作においては自分の役割を各時代のそれぞれの人びとの姿を讀者に伝える仲介役とする小熊が、珍しく、自ら語り出している。ここが太田の言う「アウターナショナル」と、どう共鳴するのか？ また本著作での重要な強調点、植民地時代の台湾、朝鮮在住の日本人やマイノリティ、社会内部の女性たち、という存在を、今、つなげる糸は何？ そもそも「日本人」という存在の、法と文化における可塑性の限界はそれぞれどこにある？ 再び、この項続く。